

特集 「ライフキャリアと日本語教育」

193号特集部会

中俣 尚己(部会長), 菅谷 奈津恵, 中島 祥子, 村澤 慶昭

【本特集号の趣旨】

今回の特集号のテーマは、「日本語教師養成・研修の最前線とその課題」としました。本特集は、日本語教育学会の理念体系の社会的研究課題3「多様なキャリア形成のための日本語教育内容の体系的再編成」に基づきます。

かつては、「ビジネス日本語教育」のように仕事場面で必要とされる日本語の教育や、留学生の日本企業への就職支援という文脈での「キャリア支援」が日本語教育のトピックとなってきました。しかし、近年ではキャリアを職業選択という狭い意味のみで捉えるのではなく、生涯にわたる個人の成長・発達として捉える動きが広がっています。個人の人生を長いスパンで見たときに、日本語教育が果たす役割は何でしょうか。日本語教育関係者は何ができるのでしょうか。本特集では、これらの問題を考えるために、最新の研究の動向や多様な形の実践を取り上げた最前線の論考を取り上げました。誌面上で、みなさまとともに、ライフキャリアに関する議論を深める機会とできればと思います。

本特集号では本テーマについての寄稿論文を5本依頼いたしました。さらに投稿論文として1本が採用され、計6本の論文を掲載することができました。

【本特集号の内容】

本特集号で掲載する寄稿論文5本と投稿論文1本は以下の通りです。

- ・日本語教育におけるキャリア研究の動向と展望
(松尾 憲暁氏・山本 晋也氏・高井 かおり氏：寄稿論文)
- ・キャリア日本語教育としてのCOIL(オンライン国際協働学習)の意義
—「三つの対話」の交錯による自己構成の観点から— (古賀 万紀子氏：寄稿論文)
- ・海外の大学におけるキャリア形成支援
—AI時代のためのプロジェクト型ビジネス日本語教育—
(ウォーカー 泉氏：寄稿論文)
- ・キャリア教育としての留学生インターンシップ
—外国人材の定着を見据えた教育設計のための課題整理と実践例—
(栗原 由加氏：寄稿論文)
- ・ライフキャリアへの意味づけを促す成人日本語教育
—台湾の非職業的な日本語学習の事例から— (内山 喜代成氏：寄稿論文)
- ・ミャンマー人介護人材の国外移動と日本語学習
—キャリアの「救済」と「拡張」— (水戸 貴久氏：投稿論文)

松尾ほかの論文は、過去20年間における日本語教育とキャリアをめぐる研究のトレンドをまとめたもので、研究内容にまで踏み込んで20年分の文献数の推移を明らかにした力作です。数値を示すだけでなく、主要な論文が多く紹介されており、今後キャリアについて研究を行う方にとっても必読の一本と思われます。

古賀論文は、日本と韓国の大学を結んで行われたCOIL（国際協働オンライン学習）の実践を取り上げ、参加した学生の毎回の振り返りを「対象との対話」「自己との対話」「他者との対話」という3つの観点から分析し、意識や行動がどのように変容していったかを明らかにしています。「日本語とどう向き合うか」「他者に何を望むか」といった形で経験を語り直すことにより、学生たちは日本語を使うことの意味を再構成し、協働的に自己を構成していくことが論じられています。

ウォーカー論文では、シンガポールの大学で実践された「企業訪問」プロジェクトが取り上げられています。本実践はヴィゴツキーの枠組みを用い、日本経済が停滞する中、シンガポールでビジネス日本語を学ぶ意義は何かといった問題意識を背景にしたものです。協働的かつ自律的な学習を進めるための様々な工夫・しかけが紹介されています。学生のAI利用を巡る課題についても論じられており、多くの読者の参考となる論考となっています。

栗原論文は現在多くの大学で行われている留学生インターンシップについて、その課題を整理し、論じたものです。日本人学生むけのインターンシップとは異なる課題について、様々な角度から検討され、最後に事例の紹介も行われており、その個別事例における長所と課題についても言及されています。今後、同様のプログラムを企画する上で参考になる論考となっています。

内山論文は台湾の「補習班」と呼ばれる民間の教育機関で、非職業的に日本語を学び続けている1人の成人学習者に焦点をあて、複線径路等至性モデリングを用いて、学習者が自身の学びの価値にあった教室デザインにどのように関与し、実現していくのかということ进行分析しています。また、職業上の要請ではない、ライフキャリアにおける日本語学習の意義についても論じられています。

水戸論文は、2012年の軍事クーデター後に来日し、介護職に就いたミャンマー人を対象にインタビューを行い、渡日や職業選択の動機と日本語学習が果たした役割を分析したものです。クーデターに端を発する混乱が出国を促しており、社会的・制度的要因により主体的選択は大きく阻害されていたこと、一方で、日本語学習が「救済」と「拡張」の役割を果たしていたことが分析されています。

以上の6本は、多様な立場の学習者の日本語学習のライフキャリア上の意味について様々な観点から具体的かつ詳細に論じたものです。5W1Hなどと言われますが、ライフキャリアと日本語の関係を考える論考はいずれもWhy、すなわち「なぜ日本語を学ぶのか?」という問題意識が背景にあると思われます。そして、このWhyという問いは、WhenやHowと異なり、どこまでいっても個別的なものと言えるでしょう。この問いは学習者個人の人生と分かちがたく結びついているからです。このような問いに対する答えを明らかにするためには、学習者個人の人生に寄り添うようなアプローチが必要になってくるものと思われますが、6本の論文はそれぞれ異なる方法論でこの問題に切り込んでおり、同様

の課題に関心のある研究者にはその点も参考になるものかと思います。

一人一人の学習者に寄り添うことは言葉で言うほど簡単なことではないでしょう。しかし、6本の論考には日本語教育と学習者個人の人生について考える上で非常に多くのヒントが含まれていると思われます。ぜひ熟読いただき、読者の皆様にもライフキャリアという観点から日本語教育や学習者について考えていただければ幸いです。